寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

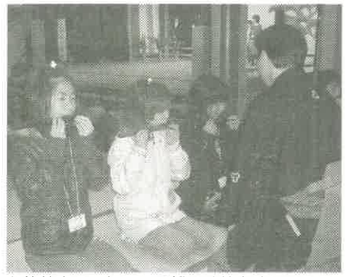
毎年恒例 大好評!! 「こやのせ座・能」 第7回

演目は「仕舞」が〔笹え段〕と〔船橋〕 2演目

「能」は女性を主人公とするものがほとんどの三番目物の中でも知られる〔羽衣〕で　天女を観世流シテ方：森本哲郎氏　漁師の白竜を宝生流ワキ方：坂苗　融氏の両名が演じます。

又「能」の普及に務められる森本哲郎氏のご協力を持ちまして　今回も　未来を担い行く小・中学生に日本古来の伝統芸能「能楽」を実体験させ伝統文化に対する理解を深める事を趣意として「親子お能教室」(無料)を併せて開催致しますので挙っての応募をお待ちして居ります。

尚　当日には「こやのせ座ボランティア」によるバザー(うどん・そば・カレーライス・コーヒーなど)の用意もございますのでご利用の程　宜しくお願い申し上げます。


お能教室の一場面　見慣れぬ笛を吹いてみる

↑毎年好評の「こやのせ座・能」
←「羽衣」の一場面

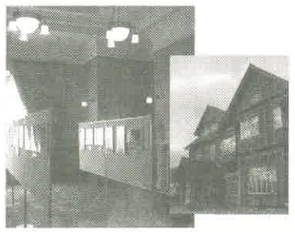
第33回 企画展 「ふるさとの長崎街道展」のご案内

平成21年2月14日(土)～3月22日(日)まで、みちの郷土史料館企画展示室におきまして、ふるさとの街道遺産を見つめ直し、沿線の史跡や伝承を紹介する企画展を開催予定です。古文書や絵図、写真、陶磁器なども展示しますので、お気軽にお立ち寄りください。

「木屋瀬の風景」写真展 in 門司港 無事終了

平成20年9月1日(月)～6日(土)まで、門司港レトロ地区の「旧門司三井倶楽部」多目的スペースで出張展示を開催しました。

記念館および運営協議会職員が交代で案内にあたり、明治・大正・昭和の古写真から、最近の写真コンテスト入選作品まで、木屋瀬の歴史・文化や見どころを紹介しました。東京や関西など遠方からの観光客をはじめ、662人の方にご来場いただき、秋の宿場まつりに向けてＰＲすることができました。



熱戦!! 接戦!! 第8回 木屋瀬いろは歌留多大会

〔こやのせ座〕新年の恒例行事〔木屋瀬いろは歌留多〕ですが　今年は木屋瀬中学の野球部・吹奏楽部の参加協力もあり　総勢二百名を優に超える参加者で熱気あふれる盛大な大会となりました。

因に入賞者は（敬称略）

●〔小学生の部〕
優　勝（萩岩花蓮・木小6年）
準優勝（松下遥香・星小3年）
第3位（上野　遼・木小2年）
第3位（市丸雅浩・星小3年）

●〔一般の部〕
優　勝（篠原　実・木中）
準優勝（大原奈々・木中）
第3位（宮原菜々子・木中）

と云う結果でした。

おめでとうございます。

さて　本大会の隆盛と発展性の大なるを作者である〔故・岩井屋不彫さん〕に心より敬意と謝意を表し　一昨年は〔木屋瀬いろは歌留多〕が作られた経緯・事由ならびに本大会の開催趣旨をご説明させて戴き昨年は〔不彫さん〕の功績と足跡を簡略に紹介させて戴きました。

そこで　寄稿も第8回目ともなりますと私も少々ネタが尽きつつありますので　今回よりは〔岩井屋不彫さんのいろは歌留多〕の㋑から順に　私の拙き識にて作成しました説明文を添え　紹介させて戴く事とさせて戴きます。

〔「不彫さん」の造形の深さと共に永い歴史に培われてきた木屋瀬のイロハを学ぶ事の出来得る貴重な作品である事を改めてご理解戴けるのではなかろうかと存じます。〕

㋑　飯塚　木屋瀬　碁盤の表

【説明】「原田・山家に冷水峠　エッホ山駕籠内野宿　飯塚・木屋瀬碁盤の表　駒を早めて　黒崎へ」と　宿駅往時　街道を往来する人たちが筑前六宿を唄った街道唄と伝えられる中の一節でございまして　筑前六宿でも　険しい冷水峠を隔てる原田・山家宿や内野宿とは異なり筑豊の大河・遠賀川の沖積平野部に位置する飯塚宿と木屋瀬宿との間は　その平坦さから碁盤の表と唄われたものでございましょう…以上

それでは〔不彫さん〕の人物像を偲ばせる辞世の歌を最後にご紹介申し上げ今回のメと致します。

思案橋　こえてぞゆかん　さわやかに
又いますくに　母いますくに
合掌

こやのせ座運営部会長　柴田泰助

長崎街道木屋瀬宿に休泊した大名や長崎奉行　其の六

木屋瀬みちの郷土史保存会　松尾　良美

前回までは、御茶屋に宿泊した藩主黒田長溥侯や薩州宰相島津斉淋侯と長崎奉行稲葉出羽守の木屋瀬宿での送迎・接待の役割等について記述した。大名や奉行の供揃は、幾十人から数百人以上に及ぶ人数になるので、宿場の役人や町方の人馬方・問屋衆の対応が大変だったことが想像できる。

史料館に入って右側に、絵師麻生東谷作『木屋瀬宿之図』を基にして制作された木屋瀬宿のジオラマ(町並の立体模型)の説明板に、当時の戸数二百六十軒人口千六百人と記されている。当時の旅籠数については、残念ながら記録がなく口伝で二十数軒といわれていただけである。現存する地図『明治二十二年の町並み』では、家業を宿屋と書かれたのは、長門屋(中町)宝屋(本町)山本屋(本町)幸屋(新町)柏屋(改盛町)と屋号なしの木賃宿二軒(感田町)である。文久二年の参勤交代制の緩和によって、幕府の権威が徐々に失墜し明治五年の伝馬(問屋・飛脚)制度の廃止により、明治二十二年頃迄は約二十七年も経過しているわけで、人馬の往来で賑わっていた宿場は完全に衰微した町並に変貌し、多くの旅籠は、店を閉じて家業を変えた。

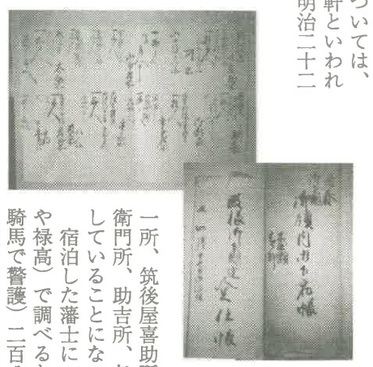
昨年の秋、記念館の学芸員さんより「福岡地方史研究」に執筆されている有田和樹氏が調査された萩尾家文書『福岡藩旅籠屋号帳』の木屋瀬宿の項に、幕末には左記の旅籠があったと記載されている。

①町茶屋守甚之助（薩摩屋）②大黒屋善三郎・善兵衛③綿屋仁平・長五郎・佐市・重五郎④俵屋久右衛門・仁助⑤植木屋甚平・孫助⑥筑後屋喜助・兵右衛門⑦紙屋左蔵・長五郎⑧泉屋徳助⑨中野屋幸六⑩万屋甚三⑪かど屋円平⑫町茶屋守源平（長崎屋）⑬和田屋弥市⑭幸屋忠次⑮長門屋弥吉⑯加一所、筑後屋喜助所、筑後屋兵右衛門感田町嘉兵所、六衛門所、助吉所、与右衛門等々の合計三十九ケ所に分宿していることになっていた。

宿泊した藩士について、黒田藩の分限帳（武士の身分や禄高）で調べると、三木権六は馬廻役（主君の周囲を騎馬で警護）二百八十石、又三所に泊まった霍井甚平も馬廻役で二十石取りであった。山口孫右衛門の旅籠又所は、柏屋で改盛町に現存する伊馬春部生家の本家であり、彼の禄高は八百石である。

この下宿帳には、宿名として旅籠の屋号か家主の名が書き込まれていることは、宿屋稼業の旅籠と普段は他の商いをしていて、大名の御泊込みの時に臨時に宿泊を受ける店や一般の町屋であったことが推察できる。また、この下宿帳に足軽の数・荷駄を運ぶ人足や馬と駕籠の数、助郷の村名も記載されている。

以上の通りに判明した宿泊先の旅籠名や宿主名を古老や子孫の方々へ聞取り調査をすれば、もっと確度の高い木屋瀬宿の旅籠の存在がわかると思うが、口伝による旅籠数二十数軒は間違いがない。



木屋瀬宿場の旅籠名は!!

□屋太平⑰山本屋茂助等々。以上であるが問題となるのは、同じ屋号の旅籠が五軒あるので、親類であるのか、同じ屋号で旅籠の商いが出来ただろうかという素朴な疑問を感じた。しかし、合計二十五軒になるので、口伝などが想像できる。

おり二十数軒にほぼ合致することができたようだ。

文久元年四月十七日に宿泊した黒田侯の「御領内御下宿帳」と「殿様御下国達人足仕帳」を開くと、各旅籠に分宿した藩士達の氏名と宿の屋号や宿主が書かれ、宿泊した藩士の荷駄を運ぶ郡内の助郷人足や駄馬数が記されている。御泊込と書かれ、御茶屋所・三木権六様、「又所・山口孫衛門様、山本屋所・安藤奥十郎様・三宅狭助様、太助所・御側筒、感田町善七所御側筒、御郡家・御奉公様御付添、金子屋所御陸士、平三所御陸士目付、又三所・霍井甚平様、以下善六所、角屋所、平作所、灰屋由兵衛所、新入屋所、半助所、猪助所、植木屋孫助所、与七所、米屋陣左衛門所、きの国屋所、森口屋正助所、下町吉衛門所、畳屋勘衛門所、中町伊三郎所、甚助所、よし野屋所、甚八所、新吉所、松屋十所、長八所、俵屋久右衛門所、清一所、筑後屋喜助所、筑後屋兵右衛門感田町嘉兵所、

すでに16年の歴史が… 筑前木屋瀬 宿場まつり

今回も昨年同様二万五千人は優に超える人出大盛況のうちに挙行出来得ました。

此れも偏に　ご寄付並びに事前準備から事後作業に至までご協力戴きました木屋瀬住民の皆様方の郷土・木屋瀬に寄せる熱き思いの賜物と　感銘し　心よりお礼を申し上げる次第です。

尚　今回特筆すべきは本行事開催当初からのキャッチフレーズでメインテーマである"みんなで踊ろう宿場をどり"に木屋瀬中学吹奏楽部の面々約五十名が〔宿場踊り〕を短期習得し参加してくれた事により〔踊りの庭〕が大きく広がった事でございます。

つきましては〔踊りの庭〕が今後更に大きく広がるように　地域住民の〔宿場踊り〕習得問題や此れに伴う揃い浴衣の問題．又　開催趣旨と娯楽性との兼合いなど　まだまだ根幹的課題もございますが　これからも木屋瀬住民の郷土の誇りとなる行事へと成長する事を願い〔本物志向の継続〕と〔自主企画・自主運営〕を信条として　尚一層の熱き思いで取り組んで参る所存でございますので皆様方にも尚一層のご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げご報告並びにお礼の挨拶とさせて戴きます。

第16回筑前木屋瀬宿場まつり実行委員会　藤　嘉量

シリーズ　筑前木屋瀬宿　神仏めぐり

第十五回　凛として早朝坐禅

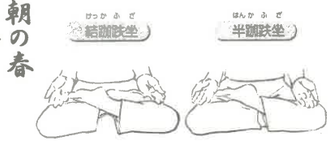
昨年の暮れから今年の正月にかけて、永源寺の早朝坐禅会に参禅しました。永源寺は木屋瀬宿記念館の後ろを流れる遠賀川の土手の大銀杏のすぐ真下にある禅宗のお寺です。創建時は金剛山の麓にあり、金剛寺と称していましたが、兵火に遭い消失、大永三年(一五二三)この地に移転、時の年号「大永」の二文字を割って「大義山永源寺」として開山されました。日本の禅宗には、臨済宗と黄檗宗、曹洞宗があります。永源寺は道元禅師を宗祖とする曹洞宗の法統を継ぐお寺です。道元禅師は中国の宋の時代に天童山景徳寺で修行し、如浄禅師から仏法を継承しました。その仏法は、仏教の開祖釈尊が悟りを開かれた契機が坐禅であり、仏教の根本は坐禅であるとして、「只管打坐」(ただひたすら坐禅する事)「即心是仏」(坐禅によって悟りを開くのではなく坐禅する心身そのものが悟りであり仏である)と道元禅師は受け取られ主張されました。

過日、夜も明けやらぬ早朝永源寺を訪ねました。門前は水が撒かれ境内は掃き清められていました。本堂にはすでに灯明が燈され、堂内では僧衣の住職が着座されていました。まず、時計を外し情報を断絶し、靴下を脱ぎ素足となり自分の足の裏から大地を感じることから坐禅が始まります。

本堂にはいると御本尊へ合掌し、中央でなく左右の壁側から入堂し自分が坐禅をする場所に立ち止まり壁面を向き、低頭合掌し対面にも合掌礼拝して、坐蒲(坐禅用の丸い座布団)の上に、あぐらの状態で腰を下ろし足を組み腰を安定させて壁の方を向いて坐禅します。これを面壁といいます。

足の組み方は、左足をのばし右足の甲を左足の太ももにのせます。同様に左足を右足の太ももの付け根にのせる。この座り方を結跏趺坐と言い、これが出来ない方は、片方だけでするのも許されます。これを半跏趺坐と言います。手は卵を握るような感じで両手で組み腹に引き寄せます。坐禅のポイントは、調身(姿勢を整える事)、調息(腹式呼吸で吐く息をゆっくり静かに行う)、調心(精神を集中する事)この三つを統合する事が大切といわれています。坐禅の呼吸は腹式呼吸(丹田呼吸)です。まず息を吐く事から始めます。下腹(丹田)を意識して細く長く息を吐き完全に吐き終わったら、鼻から下腹(丹田)がふくらむまで吸い込みます。これをリズミカルに連続して行うのです。この丹田を意識して長く深く呼吸を行うことで、右脳が活性化して免疫力が増し老化防止に役立つといわれています。

最近亡くなられた永平寺の前貫主宮崎禅師は百六歳、清水寺の大西良慶和上も百八歳で往生されました。このような長命は坐禅や読経における仏教の呼吸法が一つの要因ではないでしょうか。丹田呼吸法は正座でも椅子に座ってでも歩きながらでも出来ます。今や世界中で経済が極度に発達した結果、精神や心がなおざりにされているようです。坐禅は仏教の修行の一つで精神の安定をもたらしてくれます。一日一回仏壇の前に静かに座って御縁を感じるのも幸せな時間ではないでしょうか。



丹田に宇宙を納め今朝の春
朝粥のたくあん三切れ梅一つ

本町　野口靖彦

企画展「井上家展」平成20年11月8日～12月14日
たくさんのご来場ありがとうございました

今回、記念館で開催された井上家展では、我が家の江戸時代からの歴史を紹介して頂きました。

井上家は江戸時代から続く旧家です。ただ、井上姓は明治に入ってからで、それ以前は、養子縁組が続くなどしてハッキリとした事が分かりません。

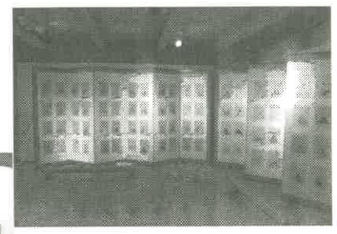
仏壇の中には「井上」よりも「麻生」姓が多くあります。私の少年時代、その麻生姓を名乗る人が木屋瀬の感田町にいて、父は「この人は井上家にとって大切な人だ」と言っていました。両親の「麻生姓を大事にするように」という言葉も未だに私の耳に残っています。

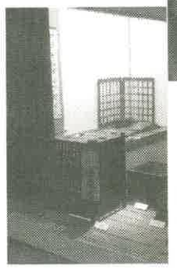
井上家は古物商から質屋を開業していました。当時の質屋というのは今の銀行のようなものでした。

祖父はいつも羽織袴で算盤片手の姿であったと思い出されます。お金を勘定する算盤ということもあってか、脚でまたいで大目玉を喰らった覚えがあります。

また、祖父は衣類の質にも実に詳しく、木綿とか錦紗などがたくさん家にありました。着物を整えたり仕舞ったりするのも技術があって、それを上手に仕分けする祖父の姿は見事なものでした。

私が新聞記者を目指していた頃、「お前はお金に縁がない男だな。文章は幾ら書けても金は稼げないぞ」と皮肉って言う父の姿が恨めしかったのを覚えています。しかし縁があって新聞記者になれた時、父は非常に喜んでくれました。





我が家には、箱階段で昇り降りする二階があります。今回の出品物の多くがここに残されていました。浄瑠璃の見台と俳句屏風は江戸時代からのもので、私がそれを父から引き継ぎました。見台の漆塗りなどは、今でも立派です。

どの家にもいろんな出来事があるでしょうが、こうした歴史を積み重ねてきたものには意味を感じます。また、木屋瀬の歴史とも深く関わっています。

それを今回の井上家展で、実に見事に展示して頂きました。時代を重ねてきたものを現代の人たちに見て頂き、その歴史を感じてもらえたのではないでしょうか。

また、我が家にとっても良い記念となり、非常に嬉しく思いました。この場を借りて、記念館の方、見て頂いた方々に心よりお礼を申し上げます。

井上　昭太郎

木屋瀬(一)…宿駅…

往時、国内の主要道路の要所に宿駅が定められていて、その道路を大路、中路、小路と三区分して呼んでいた。「大路は京都より太宰府に赴く山陽道である」と記されていて、大路と呼ばれる道はこの山陽道だけであった。木屋瀬宿駅はこの山陽道と太宰府を結ぶ線上の道路の中に位置していて、交通の要衝であった。但し大路の宿駅業務(駅場の常駐、荷物輸送その他)を大路の宿駅に等しい設備をもって、引き続く事が出来ていた宿駅であったかは明らかではない。

この頃唐天竺と呼んでいた、唐の「落陽、長安」は、世界の文化が集積した大文化都市であったので、その文化を吸収するために、遣唐使を初めとして、志のある人々が、唐に渡って行った。唐からも、先進文化を伴って僧を初め多くの文化人が次々に渡って来た。

こうした国際交流のための港は、唐に一番近い九州の「那の津港」今の博多港が利用されていたので、国際交流の中で、太宰府と京師を結ぶ最短距離の道路の木屋瀬宿駅に、かなりの休泊者があったものと考えられる。

徳川の時代になり国内の道路の整備が進められて、何々街道と呼ばれる大街道が全国的に完成した。九州では当時の国道一号線であり、九州の表街道として、長崎街道が完成した。幕府は、これ等の街道に四里ないし五里毎に宿場を定めた。

木屋瀬は、古くからの宿駅であったものがこれによって宿場町と呼ばれるようになった。宿場が出来て庶民も、外出や旅立ちが心配なく出来、宿場町は繁栄した。この長崎街道は、今も木屋瀬町部の中央を貫いていて町の本通りとなっている。

長崎街道は、日本のながい鎖国時代から、ただ一港だけ日本の窓として開港された長崎港に通ずる最も重要な街道であった。

長崎港に上陸した外国の文化が、この長崎街道を上り江戸に集まり、日本文化として吸収されるので、幕府も長崎街道を中央の五大街道以上に、重要な街道としていた。

木屋瀬は、外来文化が次から次と江戸へ向かうルートであり、国際交流の人々の良き休息の宿場として栄えていた。

木屋瀬を通っている長崎街道が筑前国内に黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田と六つの宿場が出来たので、筑前六宿と呼んでいる。

博多や唐津方面に行くには、木屋瀬宿より木屋瀬大河(遠賀川)を渡って、筑前内宿街道と呼ぶ赤間、畔間、青柳、箱崎と行っていたので、木屋瀬は追分宿とも川越え宿とも呼ばれ、二つの街道の分岐点であった。

木屋瀬の本陣は、西九州や南九州の十五の大名の休泊が当になっていたし、その他の要人や有名人の休泊も相次いでいた。

文化九年二月二十一日(一八一六)「シーボルト」は、江戸参府の紀行分の中に木屋瀬地方は平坦で、畑にはワセオオムギがまかれていた。雁、野鴨、烏の群れは播かれた種を求めていて、そこかしこに鶴が群れをなしていた。至る所に、鳥脅がつけてあって、その四角い板に木の棒をつけて吊るし、風に動いたり通行人がこれを鳴らしていた……

元禄五年(一六九二)オランダ人医師「ケンフェル」は、江戸参府の紀行文の中に、

わたしの昔話

木屋瀬は大村にて町とも言うべきほどなり。この地の人に、甚だ黒く又汚くして行くは石炭を焼くがための人なるべし……

「菱屋翁文化三年」の筑前紀行文の中に

木屋瀬宿には、町家七、八丁あり宿屋茶屋多し、宿場の入口には、冷水峠へ、赤間越への道標あり……

こうした宿場木屋瀬の良き時代を忍ばせる紀行文が残されている。

木屋瀬宿場の本陣は、黒田候の支配下にあり建造物には黒田候の紋が入っていた。

宿場は宿民によって支えられていた。宿民はその宿場の伝馬役やそれに伴う、義務負担があったので、これを負う事の出来る人々を宿民と定め、こうした人々の力強い組織の上に宿場が出来た。

宿場での義務負担は、通常表通りに面した家々の間口の広さに応じて課せられていたが、宿場の中央と端々とでは、かなり異なっていたようである。木屋瀬宿の表通りに面した、家々の間口が三間半に統一されているのは、宿場業務上の義務負担割当算定に起因していると考えられる。

柴田豊廣遺稿集より

子供ゑびす
寒さに負けず、元気に頑張りました。

十二月六日、七日と須賀神社にて、九名の児童による子供ゑびす祭りが行われました。元服の意味をもつ、この祭りは、昔は数えの十一歳、現在では小学校四年生の男子を頭(かしら)と呼び、頭が主役のゑびす祭りです。笹山笠を作り、紅白の幕を張り、その幕に九名の頭の名前を書き、町内を曳き廻します。

二日間とも、師走らしい寒い天候の中、初日は、元気いっぱい山笠を曳き、社宝を持って、御神幸行列と、町内を廻りました。

二日目は、山笠を曳いた後、祝い膳(江戸時代には、大名に振舞われた物)につき、滞りなく二日間の行事を終える事ができました。

今回、子供達が、この行事を経験した事で、木屋瀬の伝統文化に関心を持つと同時に、継承していってくれる事と思います。

最後になりますが、準備の段階から山笠解体まで、ご協力頂いた方々、ご祝儀まで頂いた方々に、保護者を代表して、心より御礼申し上げます。

世話人代表　髙鍋　勝巳